

生活協同組合パルシステム東京の皆さま、ご支援を賜りましてありがとうございます。

【事業名】「貧困」かつ家庭環境が困難な状況下に暮らす子どもたちの支援・育成事業

【背景】南アフリカでは、1994年まで続いたアパルトヘイト(人種隔離政策)下で、アフリカ人(黒人)たちは、「自分の力で生きていく」という人としての基本的な権利が否定されていました。その結果、伝統的に行ってきた農業(周囲の自然を保全・利用しながら行う)も破壊され、白人の経営する都市部の鉱山・大農場への「労働者」として出稼ぎするしかない状況が作り出されました。アパルトヘイトが終わっても、自分たちの暮らす地域で生きる術がなく、この「出稼ぎ社会」の構造は変わっていません。一方、黒人は、アパルトヘイト下で教育を受ける権利も剥奪されていたことから、民主化して「人権」を回復させても仕事を得られず、その子どもたちも十分な教育を受けられず仕事が見つからず・・・という世代を超えた悪循環がいまも続いています。結果として、黒人人口の失業率は30%にのぼり、特に、18～34歳の若い世代では50%を超えます。こうして貧富の格差は広がり続け、現在「世界の格差社会」と言われています。また、HIV/エイズの問題も解決されていません。現在一国内で世界最多の740万人がHIVに感染しています。特に、15～49歳の若い世代で5人に一人が感染、エイズで親を亡くす子どもが後を絶たず、「エイズ遺児」が約210万人いると報告されています。

こうした状況下で、南アの農村地域では、親や保護者が出稼ぎで不在、あるいはエイズ等で親を亡くすなどの理由で、祖母と、あるいは子どもだけで暮らす世帯が多く見られます。農村に暮らしながら農業で生計を立てる術を知らないため、最低限の食事を得ることすら難しい状況に置かれています。こうした子どもたちは非常に困難な暮らしを強いられるなか、周囲にサポートしてくれる大人が不在で行き場を失い、アルコール・ドラッグ・犯罪・レイプ・売春・エイズなど、様々なりスクに脆弱な状況に置かれています。このことがまた、社会課題が次の世代へとつながる悪循環の要因となっています。

【事業の目的と活動概要】

以上のことから、南アの農村地域でOVCを支えるとともに、中長期的には世代を超えた負の連鎖を断ち切り、子どもたちが「貧困」で苦しむことのない社会づくりを目指した「変革」を伴う活動が求められています。南アの農村地域で、①OVCが通うケアセンター(Drop in Center、以下DIC)においてOVCの居場所をつくり、必要とされるケアサポートを日常的に提供する、②OVCが自ら考え、選択し、行動できるように、特に10～20代の若者(以下、青少年)のエンパワメントを行う、③これらを地域の住民・関係者が継続的に支えていくための地域づくり、そして④お金をかけずに持続的に食べものを得るための菜園づくりを通して、OVCを支えながら、子どもたちが希望のもてる社会をつくること、それが世代を超えて伝わっていくような地域・社会・未来をつくることを目的に活動を行います。

◆2018年度の活動の位置づけ:2012～2017年度にカンパをいただいた活動の成果と見えてきた課題



在宅介護ボランティア育成



子ども支援



予防啓発



HIV陽性者支援



家庭菜園

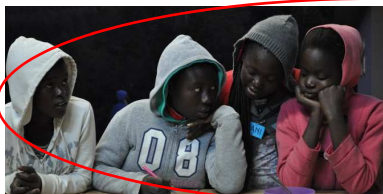
<2012～2015>

- 地域の母親が担う「ケア・ボランティア」の育成を通じたHIV陽性者や親を亡くすなどした子どもたちのサポート(在宅介護ボランティア育成、子ども支援、予防啓発、菜園づくり)、HIV陽性者支援(研修)など
→それぞれの活動で成果を確認。地域の理解と協力体制。
エイズ遺児など困難な家庭環境にある子どもたちを地域でケア・サポートする様子が見られるように。

しかし、様々な社会的要因と連動しているHIV/エイズの問題。悪化する社会状況の影響を最も受ける若い世代。
→やまない新規感染拡大。特に若者層で顕著にみられる。
世代を超えた悪循環。これへの対応が必要。

<2016～2017年度 世代を超えた悪循環に対応するため10代の青少年との活動を中心に>

- 「ケアを受ける子どもたち」から「自ら考え、行動し、将来を担う子どもたち(10代の青少年)」へ
→若者がお互いを支え合い、地域や自分の将来について自分たちで考え、行動することを促す活動(HIV/エイズやリーダーシップに関する研修、子どもケアセンターの日常の活動プログラムの充実、家庭菜園研修)
→それを支えるケア・ボランティアや地域関係者への研修



尊厳をもってNoという権利を学ぶ



青少年による菜園づくり



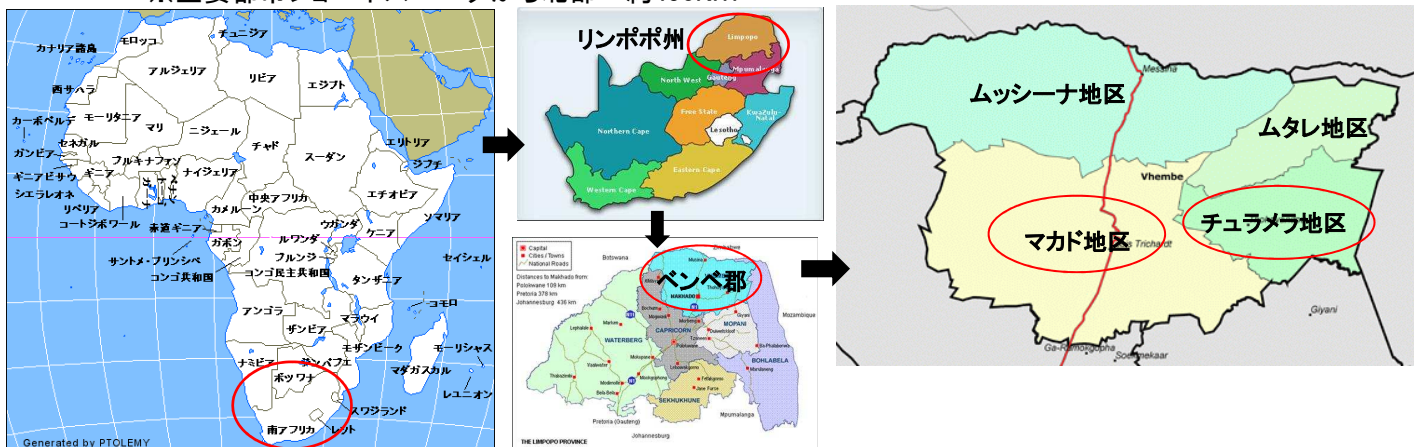
2018年度以降、成果を周辺地域に広げていきたい。

例えば、サポートを受ける→HIV陽性の青少年体調回復→自信→行動変容→他者のサポート、という好循環が見られるように。

2018年度上半期は、新しいパートナー(子どもケアセンター)および活動地を決めるための調査・情報収集→2つの子どもケアセンターと協働を決定・合意。下半期・10月から活動を開始(「平和カンパ」によるご支援開始)。

【活動地】南アフリカ共和国 リンポポ州ベンベ郡マカド地区およびチュラメラ地区

※主要都市ジョハネスバーグから北部へ約450km



【パートナー】	ンタナノ・ケアセンター(マカド地区ムペニ村)、ムペゴ・ケアセンター(チュラメラ地区ムペゴ村)
【受益者】	<p>【直接受益者】2村の子どもケアセンターのボランティア20名、2村の子どもケアセンターに通う子どもたち約260名(うち10~20代の青少年は、約60名)</p> <p>【間接受益者】子どもの保護者・その他地域住民(両村合わせて3,000世帯)、地域の教員やソーシャルワーカー、村長、教会などの関係者</p>

【活動報告】



家庭訪問からは、掘っ建て小屋に祖母と暮らす子(左)、親がおらず姉と暮らす(中央)、隣国ジンバブウェやモザンビークからの移民で身分証をもたず学校や病院に行けないなど、子どもたちをとりまく厳しい状況がわかりました。

子どもケアセンターのボランティアらと3年間の活動の方向性や計画づくりの議論。



2017年度までの活動地の子どもたちとの経験交流。

菜園づくりのイメージをもつため、2017年度までの活動地と経験交流。菜園づくりの利点(中央)や種子の保存(右)について説明する村のトレーナー(中央写真中央)。

<10月以降>

- ・ベースライン調査(ワークショップ形式で団体、村、子どもたちの現状把握、各社会課題の相関性の把握。子どもたちの家庭訪問)と、これに基づき協働で行いたい活動や目指す方向性についての協議と計画づくり。
 - ・協働のイメージをもつために、新しいパートナー団体のケアボランティアと子どもたちが、2017年度までの活動地であるボドウェ村の子どもケアセンターのケアボランティアおよび子どもたちと経験交流(相互訪問)。
 - ・菜園づくりについても、イメージを共有し、モチベーションをあげるために、2017年度までの活動地で育成してきた村のトレーナーの菜園を訪問、交流。
- 新パートナーの子どもケアボランティア、青少年らとともにJVCとの活動を楽しみにしています。2019年度「研修」開始。